

# 「大学との連携で行う名古屋大学教育学部附属

## 中・高等学校の高大連携型学力形成」

前名古屋大学教育学部附属中・高等学校副校長

名古屋大学教育学部 非常勤講師（教職科目）

山田 孝

### 1. はじめに 今求められている「学力」とは何か

- ・大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）の問題から

独立行政法人 大学入試センター の Web ページより

<問題のねらい等について>

- 知識の理解の質を問う問題や思考力、判断力、表現力を発揮して解く問題を、各科目におけるすべての分野で重視。（以下略）

- ・中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）

第1章 総則より

3 2の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、総合的な学習の時間及び特別活動（以下「各教科等」という。ただし、第2の3の(2)のア及びウにおいて、特別活動については学級活動（学校給食に係るものを除く。）に限る。）の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。その際、生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

### 2. 少々長い自己紹介 附属学校での研究履歴

担当学年 分掌

研究関係の取り組み

1989年 平成 元年 高校2年副担任 生徒部

前年度より「学校改革」が続く

※学校の教育目標を決定

1990年 平成 2年 高校3年担任1 生徒部  
 1991年 平成 3年 中学1年担任2 生徒部  
 1992年 平成 4年 中学2年担任3 生徒部  
 1993年 平成 5年 中学1年担任4 生徒部  
 1994年 平成 6年 高校1年担任5 生徒部  
 ☆1995年 平成 7年 高校2年担任6 研究部 特設教科「総合人間科」開始  
 研究開発1期3年

研究主題「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発ー  
 『総合人間科』設置の試み」

1996年 平成 8年 高校1年担任7 研究部  
 1997年 平成 9年 高校2年担任8 研究部  
 1998年 平成10年 高校3年担任9 研究部

☆中学校学習指導要領（「総合的な学習の時間」）平成10年12月告示  
 平成14年より全面施行

1999年 平成11年 高校2年担任10 研究部

中高一貫ワーキンググループの座長となる

☆高等学校学習指導要領（「総合的な学習の時間」）平成11年3月告示  
 平成15年4月より学年進行で施行

☆この年、学校訪問が急増 500人近くが訪れる

□2000年 平成12年 高校3年担任11 研究部 併設型中高一貫校となる

研究開発2期6年

研究主題「高大の連携を活かした『青年期のキャリア形成』ー総合的学習の  
 発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発」

◇2001年 平成13年 高校2年副担任 研究部長 1  
 2002年 平成14年 中学1年副担任 研究部長 2  
 2003年 平成15年 高校1年副担任 研究部長 3  
 2004年 平成16年 高校1年副担任 研究部長 4  
 2005年 平成17年 高校2年副担任 進路部長 1  
 2006年 平成18年 高校3年副担任 進路部長 2 SSH研究開発1期目

研究主題「併設型中高6年一貫教育において、発達段階に応じた『サイエンス・リテ  
 ラシー』を育成する教育課程を中・高・大の協同で研究開発する」

2007年 平成19年 中学2年副担任 研究部長 5  
 2008年 平成20年 中学3年副担任 研究部長 6

◇2009年 平成21年 学年所属なし 運営委員 中学主幹・教頭

2010年 平成22年 学年所属なし 運営委員 中学副校長

2011年 平成23年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 1 SSH研究開発2期目

研究主題「併設型中高一貫教育において高大接続を考慮した『サイエンス・リテラシー』育成のための教育方法・評価方法を大学と協同で開発する」

2012年 平成24年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 2  
2013年 平成25年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 3  
2014年 平成26年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 4  
2015年 平成27年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 5

スーパーグローバルハイスクール (SGH)

研究主題「名古屋大学と一体化して『自立した学習者』を育てる探求型

カリキュラムの構築」

2016年 平成28年 学年所属なし 運営委員長 高校副校長 6 SSH 研究開発3期目

研究主題「『イノベーション・サイエンス』を目指す人材育成 ～中高大接続によるカリキュラム開発と実践～」

2017年 平成29年3月31日 退職

### 3. 大学との連携により高大連携型学力を育てる

(1) 名古屋大学教育学部附属中・高等学校とは 学校の概要

・国立大学附属唯一の併設型中高一貫校

中学1学年2クラス 高校1学年3クラス

全校でも15クラス 600人規模の学校

附属中学生は全員附属高校に進学

高校から1クラスが他中学から受検することにより入学

・教育方針 学校要覧より

「中高一貫教育により、心豊かにして主体性のある人間形成を企図している」

・まっとうな中等教育と教育実習校・研究開発学校としての役割も持つ

研究校として

共同研究 一般研究 中等教育研究協議会の開催

(2) 「総合人間科」ができるまで 「学校改革」の流れの中で

※この時の学校改革とは

歴史的にみるなら過去40年間非エリート化を掲げ、中学の普通教育の中で最大限高校に進学させる体制をとり、周囲の公立高校が進学一辺倒化する中で、本校は人間教育を掲げその実現にむけて努力をつづけてきた。しかし、内部矛盾と'90年度入試から取り入れられた「愛知県複合選抜方式」、私立校の推薦入試等の入試状況変化に本校としての新しい対応が求められるようになり、本中学からの全員進学を保証しその上に立った高校教育を前提とした。中学入学における選抜の見直しの必要が生じてきた。こうして1989年度より中学入試改革に踏み切ったわけである。

しかし、入試改革論議の中にあっても、エリート校化への歯止めを考慮に入れた最小限

の入試改革であった。何回となく行なわれた校内、及び教育学部との論議の中で、本校の教育目的、生徒像の明文化・具体化に着手せざるをえなくなり、ここに「1988年10月19日文書」（以下「88.10.19文書」と略）で次のように明らかにされた。

「本校の教育方針は、自由と自主を尊重し、生徒一人一人を心豊かで主体性のある人間として育成し、受験という動機づけのみに依存するのではなく、本来の学習とは何か、何のための学習かを常に考えさせることにより、確かな基礎学力を身につけさせ、かつそれぞれの生き方をつかませようとするものです。従って本校に受け入れる生徒は、このような教育方針を理解し、中高一貫して本校の教育を受けることを第一希望とする生徒であることが望まれます。

この様な生徒を得て、国民のための中高一貫教育(男女共学の堅持、完成教育という面を重視した中等教育、将来にわたる自己教育の能力を養う教育等)を目ざすユニークな教育課程の開発と実践及び教育条件の整備にとり組みます。」(1988.10.19 教育学部附属学校運営委員会)

丸山豊、「学校改革の歩み」の一考察. 附属学校紀要 1990

## ① 総合学習の歴史 連綿とした「総合学習」の歴史があった！

一般研究では、昭和52年から研究の記録がある

共同研究では、平成2年「教育活動の総合化」が取り組まれている

中等教育研究協議会では、平成2年と平成5年「教育活動の総合化」がテーマになっている。

※総合学習を守る教員の存在 → 複数教員により1つの授業を担当

## ② 学年テーマの設定

平成元年の学校改革の中で、小委員会が作られ、全教員がその委員会に所属して改革に取り組んだ。

第1委員会 教育課程

第2委員会 学校行事の見直し

第3委員会 脱教科の学習について

第4委員会 教育の国際化について

第5委員会 新しい生徒指導・進路指導に向けて

第6委員会 教育条件整備

この小委員会が、それぞれ方針を出し合い、学校としての方針を確定していった。その中で、第3委員会が提案したのが各学年でテーマを決めて取り組むというものであった。

中学1年「性について」、中学2年「いじめ・差別」、中学3年「平和と核問題」、高校1年「環境問題」、高校2年「戦争と平和」、高校3年「自分史・職業 or なし」と言う試案を提出した。これらがすぐに実施されたわけではないが、この時の論議が、「総合人間科」の学年テーマに発展していったと私は考えている。

また、この「学校改革」の論議の中で、名大附属としての「中高一貫教育」の柱が確定した。それが「国際理解と平和の教育」という教育方針であった。これは、平成2年

度の中等教育研究協議会の研究主題「教育活動の総合化—国際理解と平和の教育を軸として」となって、それまでの研究成果が発表された。

この検討の中で、広島研究旅行、沖縄研究旅行の原型が完成

### ③ 附属学校存続への危機感

#### (3) 「総合人間科」の開発

「1周遅れから先頭に」というよりは、先頭を行きすぎていて、2周目で先頭に！

研究委員会主導により「総合人間科」を開発。問題意識は、「学習に遅れがちな生徒」の存在。

※広義の「学習の遅れがち」としての生徒観

①偏差値に代表される一定の価値観にとらわれ、自己評価に自信を失い、人生の将来展望に希望を失いがちになっている。

②理解力が学校内、教科書の範囲にとどまり、自己とそれを取りまく社会・自然との関わりへの関心が乏しく、問題意識が希薄である。

③自ら問題を発見し、今まで学んだ知識や経験を生かして、自己表現したり、問題解決することに不慣れである。

この生徒観は、現在でも十分通用する

#### ・「総合人間科」の特徴

3つの脱 脱教科 現代の課題を学ぶために、教科の枠を超える教師の狭い専門性を脱ぎ捨てる

脱教室 地域社会に出かける・専門家や担当者から直接話を聞く  
フィールドワークの実施

脱偏差値 知的関心の形成、問題解決能力、コミュニケーション、表現する力、実践力など多元的・総合的に生徒を見ていく教科

「総合人間科」の指導原則 全教員で指導する 学年プロジェクト

#### ・教育学部教員による支援体制の確立

各学年の「総合人間科」研究支援に教育学部教員が継続的に支援に入る  
共同研究の深化

## 4. 「総合人間科」研究開発は学校改革・学校づくりの歩み

### (1) 「総合人間科」開発期

- 平成7年 総合人間科を設置 研究開発3年

研究主題「自分の人生を自覚的に選択していく力を育てる教育課程の開発—『総合人間科』設置の試み」

- 「総合人間科」導入によって授業形態も変化した

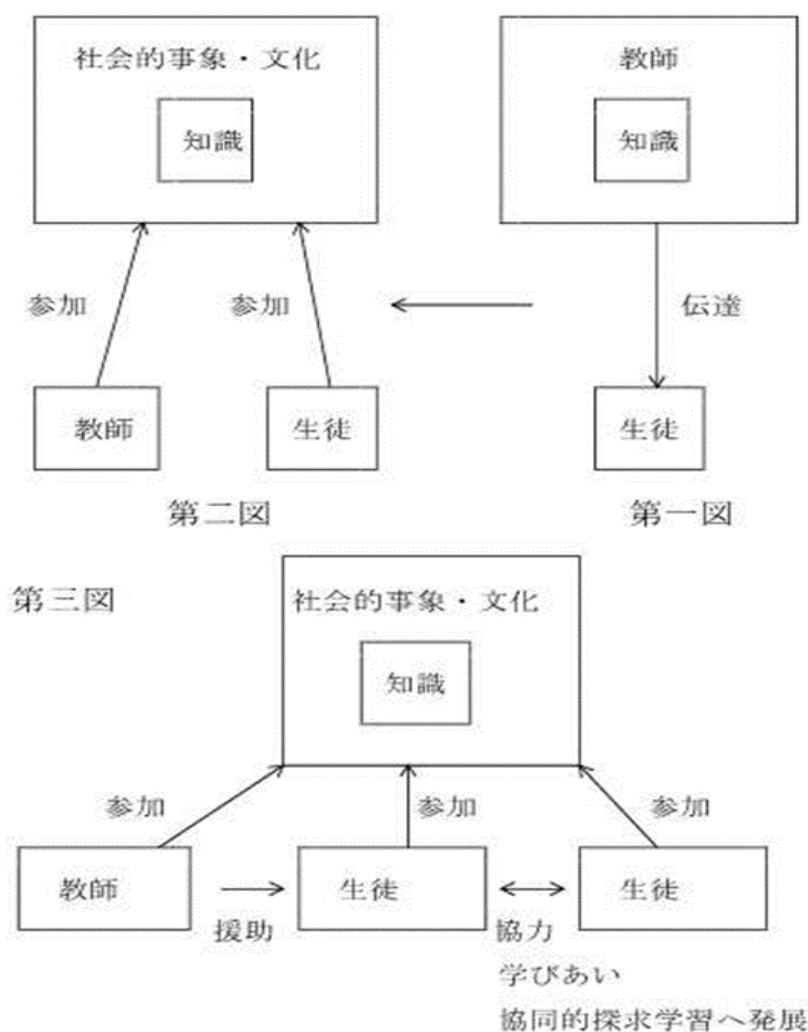
この授業形態の変化を図式化すると次のようになる。

第一図は、従来の学習方法で、教師が生徒を指導するものである。総合的学習は、第二図のように、教師と生徒が協力して学びあうことにより成立する。

さらにこの関係から第三図のように生徒が協力し合い、学びあう関係にまで発展させていくのである。

そしてこの「総合人間科」の中で、学んだ内容をより深めたり、知識の内容を確認する「学びなおし」の作業として「教室」の外に出て実地体験するフィールドワークを位置づけた。

参考文献 佐伯胖「『わかる』ということの意味—学ぶ意欲の発見」 岩波書店



(2) 「総合人間科」深化期 中高一貫校化 1-2-2-1制の導入

①平成10年6月「学校教育法の一部を改正する法律」成立。中高一貫教育による中等教育の多様化が法的に認可される。

教育学部と附属学校とで「併設型中学校・高等学校創設計画」を策定する。

#### 併設型中学校・高等学校の基本理念

- (1) 「ゆとり」の活用による6年一貫の「心の教育」の内容強化。
- (2) 柔軟で長期にわたる選択的活動を活かした多様な「個性的自立」の実現。
- (3) 6年間を通じての「総合的学習」を中核とする「体験的学習」の充実。
- (4) 寸胴型中等教育学校の閉鎖性を克服する融合力・リキュラムの展開。特に高等学校から入ってくる生徒達のための特別な配慮としての少人数、個性教育の重視。
- (5) 「より高度な学習環境」たる大学・学部との研究・教育両面における連携の強化。

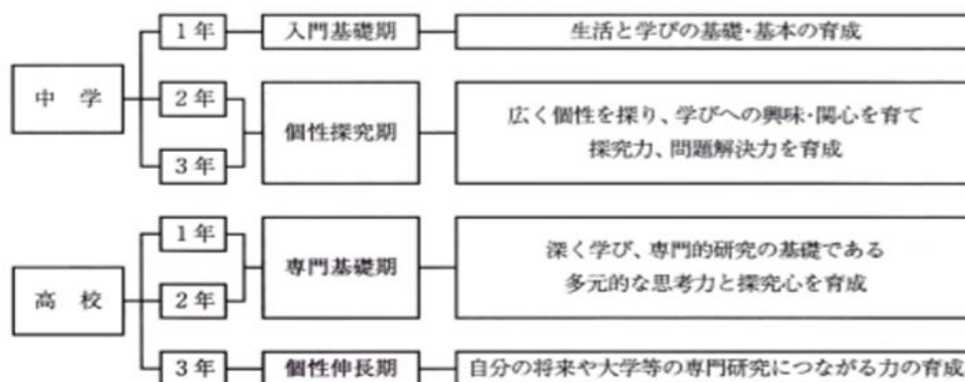
これらの基本理念にもとづいて中高一貫教育カリキュラムをWGが策定した。

#### ②併設型中高一貫カリキュラムのモデルとしての1-2-2-1制を導入

元校長安彦忠彦先生の併設型中高一貫カリキュラムモデル1-2-2-1制を導入する。中学に入学した生徒は全員高校に進学し、高校からも新たに生徒を受け入れる中高一貫校を併設型中高一貫校という。現在、国立大学附属の併設型中高一貫校は、名大附属だけである。

1-2-2-1制を図解すると以下の通りである。

併設型中高一貫教育課程の構造図 1-2-2-1制



この併設型のカリキュラムモデルの特色は、高校からの入学生と附属中学からの生徒の融合を無理なく図ることにある。それが「融合カリキュラム」である。

#### ③中学入学者選抜改革 考え方を問う、答えが1つにならないような問題を作成

今回の大学接続入試改革の先駆け

#### ④二度目の研究開発に取り組む

- ・平成12年～17年 中高一貫教育カリキュラム 研究開発2期6年

研究主題 「高大の連携を活かした『青年期のキャリア形成』－総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発」

- ・「融合カリキュラム」の開発 新教科群の設置

手法は「総合人間科」で教科横断の授業

- ・「心の教育」としての「ソーシャルライフ」を開発 社会心理学の吉田研究室と共同開発
- (3) 「総合人間科」発展期 SSHの取り組み
  - ・平成18年～22年 SSH指定 1期5年  
研究主題「併設型中高6年一貫教育において、発達段階に応じた『サイエンス・リテラシー』を育成する教育課程を中・高・大の協同で研究開発する」
  - ・平成23年～27年 SSH継続指定 1期5年 合計 2期10年  
研究主題「併設型中高一貫教育において高大接続を考慮した『サイエンス・リテラシー』育成のための教育方法・評価方法を大学と協同で開発する」
  - ・平成28年～ SSH継続指定 1期5年 合計 3期15年  
研究主題「『イノベーション・サイエンス』を目指す人材育成 ～中高大接続によるカリキュラム開発と実践～」
- (4) 「総合人間科」のさらなる発展
  - ・平成27年 スーパーグローバルハイスクール (SGH)  
研究主題「トップ型SGUと一体化して『自立した学習者』を育てる  
探求型カリキュラムの構築」

#### 4. キャリア形成としての「総合人間科」、特色ある授業（大学連携）

- (1) 「生き方を探る」中学1年生と高校3年生
  - 「入口」としての「生き方」 中学1年
  - 「出口」としての「生き方」 高校3年
  - 進路に「頑固」になる 入れる大学から 学びたい大学へ
- (2) 大学連携、ASP(Advanced Science Project)「学びの杜」
  - 「学びの杜」の出発点は、教師が受けたい大学の授業を高校生にも
- (3) 学校改革として始まった「中津川プロジェクト」
  - 短期集中型高大連携プログラム（中津川プロジェクト）の開発
  - 「07附属学校特別委員会報告」に基づく附属学校実施計画に基づくものであり、大学に設置された「教育学部附属学校協議会」の決定のもとに企画・運営されている。

#### 5. まとめ

近著 予定 ただいま鋭意執筆中！

『人間教育の探究』（全5巻）監修梶田叡一 ミネルバ書房

第2巻 タイトル（仮）『人間教育をめざした学力とカリキュラム』

第13章 中高一貫教育とカリキュラムづくり

— ころ豊かで主体性のある人間形成 山田 担当